「杜に想ふ」（神社新報）　平成26年６月２日

社会性を育む

山谷えり子

六月下旬、政府は「新成長戦略」「骨太の方針」などを発表する。グローバリゼーションの波高い中で、日本らしさを失ふことなく成長してほしいと願ってゐる。日本の国がらと日本の心に基づいた政策でなければ、どんな政策も生命をいただくことはできないからである。

ところで、昨年六月に就職先が決定した学生約千三百人を対象に「その企業で働かうと思った決め手は何か」を調査した結果が「日経就職ナビ」で公開されてゐた。結果は、一位「社会貢献度が高い」三四％、二位「仕事内容が魅力的」三一％、三位「将来性がある」二六％となってをり、学生たちの意識の中に「公」への意識が強まってゐることが示された。

この十年間、雇用流動化の中で、若年無業者（ニート）六十三万人、フリーター百八十万人、新規学卒就職者の三年以内の離職率は高卒で三九％、大卒で三一％といふ厳しい現実だからこそ、働く価値と社会貢献を願ふ若者の意識、志の芽は大きく育てなければ申し訳ない。

現在、国会では、議員立法で検討中の「教育再生推進法」（仮称）の中で、学校における職場体験活動の確保と、職業教育の体系確立などを記し、「キャリア教育推進法」（仮称）では、幼児教育から高等教育に至るまで職業教育の体系的推進、指導方法の確立、勤労観を養ふプログラム開発、財政上の措置などをうたふことを考へてゐる。

すでに、教育現場と自治体では興味深いプログラムも始まってゐる。例へば、栃木県では、「子ども観光大使」を県が認定し、観光課や経済界などと連携し、子供たちが、街の魅力、歴史、人、食べ物、場所などを紹介してゐる。保護者らは、故郷の魅力を学んで広める大使活動の中で〝社会性が育まれてゐる〟と感謝してゐる。また、瀬戸内海の小さな島「豊島」でも、子供らと農作業をおこなひ、糯米で餅を作って島中に配り歩くなどの活動の中で、「将来は島にとどまって仕事をする」と宣言する子が増えてきたといふ。岡山市では「道草プロジェクト」で地元の植物、昆虫、まちの自慢を探す活動をおこなってゐる。成田空港に近い学校では、外国人に語りかけ、地域を紹介する英語教育や、造り酒屋の街・東広島市では、外国人観光客に酒づくりを英語ガイドする子供ボランティア活動も活潑である。

学校と地域の人々が連携しながら、ふるさとの光を見出し、社会性を育む教育を幼児期から自覚的に育てていくことは、良き社会人を育てていくことにつながっていく。観光の語源は、中国の古典「易経」の一節「国の光を観る」にあるといはれてゐる。子供らが光を見出し、良き社会人、職業人としてそれぞれの場所で一灯を照らし、生き甲斐ある人生を送れるやう支援体制づくりを急ぎたい。

（参議院議員、神道政治連盟国会議員懇談会副幹事長）

杜に想ふ